経営・中村ゼミ

第17回販促コンペで学生賞

経営学部・中村世名ゼミの町田チームが、第17回販促会議企画コンペティション（販促コンペ、株式会社宣伝会議主催）で学生賞を受賞した。メンバーの町田雄飛さん、河野来美さん、植木日南乃さん（いずれも3年次）は、「苦労して練り上げた企画なので、努力が報われてうれしい。今後の自信になる」と喜んでいる。

販促コンペは、企業から出されるプロモーション課題に、解決策のアイデアを企画書形式で応募するコンテスト。広告クリエーターやプランナーの登竜門として知られ、今回は16課題に対して5000点以上の応募があった。プロの企画が大多数のなか、町田チームはファイナリスト29点に残り、学生賞に選ばれた。

河野さん、町田さん、植木さん（左から）

「アルビオンのスキンケア化粧品をアルビオンコーナーで試したくなるアイデア」という課題に、3人が提案した企画名は「肌数値で運試し」。店頭での肌診断サービスを活用した参加型プロモーションで、水分量と油分量の測定数値が、当選番号と一致した客に商品をプレゼントする。

審査対象はA4用紙10枚以内の企画書のみ。河野さんは、「伝えたい内容のうち、どこに重点を置き、規定枚数の中でどう表現するかが、とても難しかった」と話す。

「何十個ものアイデアを出し合い、試行錯誤の末に企画を完成させた」と振り返るのは町田さん。植木さんは、「顧客の潜在的欲求を深堀りして課題を解決する楽しさを学べた」と、充実の表情を見せていた。

商・奥瀬ゼミ

U24ベストポスター賞

マーケティングカンファレンス2025

商学部・奥瀬喜之ゼミ4年次の2チームが、日本マーケティング学会の「第14回マーケティングカンファレンス2025」でU24ベストポスター賞を受賞した。

同カンファレンスは、日本マーケティング学会の大規模な研究大会で、今年度は10月12日、法政大学市ケ谷キャンパスで開かれた。奥瀬ゼミは、U24ポスターセッションに参加。ボードに掲示したポスター（報告書）をもとに、研究成果の発表や質疑応答を行った。

U24ベストポスター賞の奥瀬ゼミ２チーム

小松明日香さん、塩澤まなみさん、山川真奈さん、山口愛未さんは、値引きシールのデザインを涙目のキャラクターに変更した結果、購入率が上昇した事例に着目。キャラクターの涙が消費者の援助意欲や購買意欲に与える影響と、メカニズムの解明に取り組んだ。

柳沢琉水さん、池原妃香さん、杉崎結菜さん、山中桃音さんは、商品へのこだわりが低い消費者の場合、罪悪感の喚起が購入意向を高めることを明らかにした。

研究成果を分かりやすく伝えるため、ポスター作成に際しては、レイアウトや配色、言葉遣いにもこだわった。そんな2チームのポスターは会場での注目度も高く、多くの参加者が足を止め、ゼミ生たちの説明に耳を傾けていた。

ベストポスター賞は、マーケティング分野に精通した会員の投票で決まる。今回の結果を受けて8人は、「高評価をいただけて光栄。第一線で活躍する実務家から、さまざまな刺激と示唆を得ることができた」「3年次に参加したコンテストでは望んだ結果が得られなかったので、最終年次にようやく入賞できてうれしい」と笑顔で語った。

「女子力とは何か」を巡り、軽妙な会話が繰り広げられた

文・小山内ゼミ

創作ミュージカル「女子力向上委員会」上演

文学部日本文学文化学科の小山内伸ゼミが10月28日、生田キャンパスで創作ミュージカル『女子力向上委員会』を上演した。会場のラーニングシアター201には、2年ぶりのゼミ公演を楽しみにした学生や教職員が駆けつけ、はつらつとした演技や歌を堪能した。

演劇の分析手法や劇評の書き方などを学ぶ小山内ゼミでは、学修の一環として、ゼミ生によるオリジナル作品を毎年上演。今作は2018年度に「音楽劇」と銘打って披露した演目で、今回、現ゼミ生が新たに作詞・作曲した5曲を加え、本格的なミュージカルとして再演した。

物語の舞台は、伝統と格式ある高校の茶道部。部員が女子力とは何かを巡って対立するなか、ある秘密を抱えた男子生徒が入部してくる。そこで巻き起こる騒動と、新たな一歩を踏み出す主人公の姿を、テンポの良い会話の応酬で軽やかに表現。コメディーシーンでは客席のあちこちから笑い声があがっていた。

性別の枠にとらわれず、自分らしい生き方をしたいと望む男子生徒を演じた池本昂さん（2年次）は「女性の仕草や声色を研究して役作りをした。本番ではセリフの言い間違いなどもあったが、役者同士でカバーし合い、無事やり遂げることができた」と、達成感をにじませた。

全７曲のミュージカルナンバーを披露

演出を担当した岡菜優美さん（4年次）は「4回しか全体練習の時間が取れなかったが、全員で力を合わせてつくり上げた。そうした一体感が、高校の部活動を舞台にした物語を表現するうえでプラスに働いたと思う。演出担当として、学年の異なるメンバーをまとめるなかでコミュニケーション能力を磨くことができた」と手応えを語った。

公演後、小山内教授は「会話のアンサンブルが素晴らしかった。自分たちの手でミュージカルをつくり、観客の前で上演するという経験を通じて、演劇についての理解を深めてくれたと思う」と話した。

公演の映像は、小山内ゼミのホームページで当面公開する。

【小山内ゼミHP】

国際コミュニケーション学部日本語学科

スロバキアの文化と言語学ぶ

スロバキア国立パヴェル・ヨゼフ・シャファーリク大学から文学部長でもあるレナータ・パノツォヴァ教授を招いた講演会が10月24日、神田キャンパスで行われた。国際コミュニケーション学部日本語学科の学生らが、普段接する機会の少ないスロバキアの文化や言語について理解を深めた。

前半は同国の人口や国土、建築、自然、食べ物について、後半はパノツォヴァ教授の専門である言語学の語彙論について、英語で講演した。丸山岳彦教授が進行役を務め、適宜解説を加えた。

スロバキア語には三つの文法上の性（男性／女性／中性）があり、膨大な数の活用形がある。「各家庭には現代語の辞書や文法書があり、幼少期から学び始める」という話に、学生たちは驚きの声をあげていた。

スロバキアの文化や言語を紹介するパノツォヴァ教授

母音を一切含まないスロバキア語の発音にも挑戦し、学生たちは日本語との違いを楽しみながら体感した。

参加した3年次生は、「スロバキア語と自分が専攻するドイツ語では共通点も多い一方で、名詞に活用があるところなどはとても珍しいと感じた。言語学に興味があるので、参考になる話が聞けて良かった」と話した。

11月25日、生田キャンパス10号館１階のアカデミーモールで学生部主催の秋のミニコンサートが開かれた。スウィングジャズ研究会が『Take the “A” Train』『Moon River』など４曲を演奏＝写真。多くの学生が足を止めてジャズの名曲を楽しんだ。

12月10日は吹奏楽研究会が出演し、心地よいアンサンブルを披露した。